



創立100周年さらなる未来へ!

内田 和幸 ホクレン代表理事会長
宮澤 裕樹 北海道コンサドーレ札幌

道産流通レポート

千葉県成田市の米屋(株)



ホクレンホームセンター 新入学 — 2019 —

おとなになる
“その日まで”
ずっと一緒に



ホクレンホームセンター 2019年学習机ラインナップ



KOIZUMI

子どものことを第一に考えたデスクであること、それがコイズミ学習機の原点。多彩な種類でリビング学習に最適な一台も。



ITOKI

天然木のあたたかさやさしさにこだわり、環境と子どもの健康に配慮した品質が嬉しい。日本で初めて学習机を作ったブランドです。



ホカムラ

シンプルなのにディテールに配慮した飽きのこないデザイン。薄型設計で家族のコミュニケーションが自然と生まれる。親子で使う、新しいコンセプトのデスクです。



カリモク家具

シンプルだから、「ほしい」が足せる。誰もが未永く使えるように、組み合わせや機能を追加して理想の環境を叶える学習机を提案します。



飛鳥の家具

学習机はすべて国内生産。厳しい品質管理と徹底した技術管理のもと、健康と安全に配慮した安心して長く付き合える学習机です。



飛鳥の家具

材質にこだわった長く使える機能性とデザイン性の高さが好評。ホルムアルデヒドが発生しにくい安全・安心設計です。

ホクレンホームセンター

HOKUREN HOME CENTER

札幌市東区北5条東7丁目

☎(011)711-1001

営業時間 / 平日 10:00AM~6:00PM
土・日・祝日 10:00AM~7:00PM
定休日 / 毎週木曜日

Facebook

<https://www.facebook.com/hokurenhc>

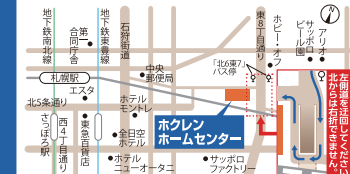


Homepage

<http://www.kagu-hokuren.com>

ホクレンホームセンター

検索



駐車場完備

1 ちゃんねる

2 新春対談
創立100周年
さらなる未来へ!
～持続可能な北海道農業目指す～

6 道産流通レポート
「成田銘菓」の風味支える
道産小豆、大手亡、小麦
千葉県成田市の米屋(株)

12 くるるの杜通信

14 今月の女子流

15 ホクレン情報館

25 エッセー
私設応援組織「日本ハムファイターズ
応援作戦会議」代表
長谷川 裕詞

26 北に生きる
道美展会員・北広島市 麻生 敏子さん

27 熱血あぐり魂『五百回魂』
TEAM NACS リーダー 森崎 博之

28 新農力発見
「芋ジャー」をコンサ選手に
フェイスブックで特産品PR
JA今金町青年部

32 こころの付箋

タレント
YASU

32 読者から

33 星澤幸子の旬な一品

「タウンスポット」と「ズームアップ」は休みました



表紙
雪の日の朝

近くの川から上がった朝霧で、木の枝には氷が付着し霧氷ができていました。徐々に日が上がり辺りを照らします。風になびく細い枝はまるでスパンコールが付いたみたいにキラキラと光り輝きます。



表紙作家
いしがきわたる
石垣 渉

1979年 北海道北見市生まれ(札幌市在住)
2002年 札幌大学経済学部卒業 製版会社就職
2004年 製版会社退職後フリーのイラストレーターとして活動
2005年 「石垣 渉 水彩画教室」開講
2009年 水彩画家として活動を開始
2011年 地球一周の船旅に乗船。約3ヶ月かけて18ヶ国でスケッチをして来る。
2013年 ロシア・ノヴォシビルスク市市制120周年記念「北海道水彩風景画展」に出品、訪露しワークショップやスケッチをして来る
2017年 道展会友推奨 水彩連盟準会員推奨
2018年 「ワンランク上を目指す 水彩画 水を操る15のテクニク」著(日貿出版社)



広報ほくれんはWEBでも読めます
www.hokuren.or.jp/kouho/magazine/

毎年つもる思い出

小学4年 村上 結音

毎年ふる雪に

私は思い出がある

一年の時

雪に足をとられて

学校におくれてしまった

二年の時

友だちと雪で

家をつくって遊んだ

三年の時

家のよこに妹と

すべり台をつくって遊んだ

今年はどうな思い出が

できるかな

毎年ふる雪で

私は思い出をつくる



児童詩誌「サイロ」平成30年・696号

山より大きい猪は出ぬ

新緑から深緑へと移ろう時季の6月から8月にかけて、昨年の北海道は長雨と曇り空の日が続き、おてんとつさまを拝む機会に恵まれませんでした。8月末に取材でお会いした70代の生産者は、生育が芳しくない豆畑に目をやりながら「こんなに天候の悪い年は記憶にない」と嘆息したものです。

9月5日には勢力を保ったままの台風21号が来襲しました。その余韻もさめやらぬ6日未明、今度は震度7の胆振東部地震に見舞われ、41人の方々が亡くなり、道民全てがブラックアウトを体験しました。

入れ物より大きな中身などあり得ないという意味のことわざに「山より大きい猪は出ぬ」があります。

私は2年間、販売店で住み込んで働く「新聞奨学生」でした。40年ほど前のことです。ある年の1月に爆弾低気圧が札幌を襲いました。配達中の自転車が倒れ、前かごの新聞が強風にあおられ、たこのように雪空に舞い上がりました。吹きだまりに大の字になり、吹雪をのりいながら「山より大きい猪は出ぬ」を何度も反すうしたものでした。人生には耐え難い事態に直面することが度々ありますが、自分はいつも「命までとられるわけじゃない。山より大きい猪は出ぬだ」と、言い聞かせてきたものです。

本号でJA今金町青年部の取り組みを紹介させていただきました。頼もしい若い世代が確実に育っていることが分かり、北海道農業に輝かしい未来を感じました。

彼らに負けないパワーで、今年1年を乗り切りたいと思っています。

(N)

創立100周年 さらなる未来へ！

持続可能な北海道農業目指す

さまざまな苦難を乗り越え、名実共に「日本の食料基地」を担ってきたホクレンは今年4月、創立100周年を迎えます。ホクレンがさらなる未来へ羽ばたいていくための地歩を固める大切な年でもあります。一方、北海道コンサドーレ札幌は昨シーズン、サッカーJ1リーグで15勝10分け9敗(勝ち点55)の成績を残し、過去最高だった11位を大きく上回る4位に躍進、北海道民に勇気を与えてくれました。ホクレンの内田和幸会長と、キャプテンとして同チームをまとめた道産子(伊達市出身)でもある宮澤裕樹選手に、今年にかける熱い思いなどを語り合っていました。

災害相次ぐ未曾有の1年

——2018年は北海道命名150年でもありました。振り返ってみて節目の年の北海道農業はどんな1年だったのでしょうか。
内田 西日本豪雨をはじめ全国的に災害の多い年でした。特に北海道は2月の日高管内の豪雪に始

まり、6月からは長雨による日照不足、さらに豪雨にも見舞われました。

9月に入ると5日に台風21号が勢力を保ったまま通過し、6日未明には北海道胆振東部地震が発生。農業関係者を含め多くの方が犠牲になられるというつらく悲しい出来事にも直面しました。北

海道全体は本当に災害が相次いだ1年でした。組合員にとっては未曾有とも表現すべき苦労の多い年であったと思っています。

宮澤 私は北海道で生まれ、北海道に育てられました。また北海道を拠点にしているチームのキャプテンをやらせてもらっています。災害が続く、道民の一人としてとても心を痛めていました。とりわけ私の出身地近くが震源地となった胆振東部地震では「サッカー選手の立場から何かできることはないか」と自らに問い続け、地震後初のゲーム(対川崎戦)に臨みました。

結果は0-7という大敗でした。でもアウェーの地まで来てくれたサポーターの人たちから必死の応援をいただき、逆に私たちが勇気づけられたのです。「下を向いてはいけない。次のゲームは北海道のために戦うぞ」という強い気持ちを持つことができました。

チームの目標 「使命を果たす」

——コンサドーレは昨季、過去最高の成績となるJ1リーグ4位



北海道農業の未来などをテーマに和やかに歓談する内田会長(右)と宮澤さん

Hiroki Miyazawa

新春対談 2019

Kazuyuki Uchida

という結果を残しました。生え抜きであり、チームを引っ張るキャプテンとして取り組んできたことを教えてください。

宮澤 これまでJ1に上がってもすぐにJ2に降格するという繰り返しでした。今振り返ると選手の力量、選手層、メンタル面など、どれをとってもJ1で戦えるチームではなかったと思います。それで「エレベータークラブ」と言われていました。昨シーズンはいい意味で戦前の予想を大きく裏切ったと思います(笑)。

一昨年は四方田修平監督(現ヘッドコーチ)の戦術でJ1残留を決め(18チーム中11位)、「J1でも戦えるんだ」という自信めいたものが付きました。

また昨シーズンは「ペトロヴィッチ監督の下で、「勝つためのサッカー」をしてきたと思います。いいサッカーをしているだけでは評価されません。勝利を続けることが自信につながり、昨シーズンの結果になったのだと思います。「勝った」という結果を出すことにより、チームが自信を持ち、メディアなども注目してくれました。それ

がサポーターや道民の皆さんに広がり、チームに一体感をもたらしてくれたのです。

3年間、キャプテンを務めさせてもらっていますが、1年目に世界でも有名な小野伸二さんが「気後れすることないよ。自分の思うようにやればいいんだ」と後押ししてくれました。その後押しを受け、私としては自分の行動、自分のプレーをしっかりすることが大切だと思ってやってきました。自分のことが見えなくなると誰からも信用されない。まず自分のプレーをしっかりすることが、(キャプテンとして)チームメイトに信認されることなのだと思います。やってきました。

内田 昨年の飛躍はチームをまとめた宮澤さんの功績が非常に大きかったと思います。それと、今の話をお聞きして感じる点があります。それはコンサドーレと同様、ホクレンも一つのチームなのだという事です。チーム・ホクレンの最大の使命は組合員の経営の安定であり、生活をしっかりと守ることです。そのためには同じ目的、共通認識に立つことが大切です。



昨年7月開催の国際農業機械展で、注目を集めた大型のロボットトラクター



「この農業は魅力的なんだよ」「これからの農業は夢があるんだよ」ということをアピールしていることが大切だと考えています。まだまだ少ないとはいえ、新規就農者は確実に増えていることも事実です。ホクレンとしては、

一人一人の思いがバラバラであってはいけません。

「われわれは農家とJAのため何ができるのか」。そして「何をしなければならぬか」。それを常に追求しながら事業展開を進めていかなければいけない。われわれトップは常に緊張感を持ち、どうやってチーム、組織をまとめていくのか。その力が組織力となるのですが、役員も職員もお互いがコミュニケーションを重ねていくことでチーム・ホクレンが一体となっていく。そのことが前提になってコンサドーレにとつての勝利、われわれにとつての「組合員の経営安定と生活を守る」という最大の使命を果たしていくことにつながるのだと思います。

当たり前前においしい 北海道の農畜産物

——北海道農業に対して持っているイメージを話してください。

宮澤 私たちは食べることも仕事の一つです。チームに管理してもらいながらご飯や野菜、肉、牛乳、乳製品、魚などをバランスよく食べ

なくてはいいけません。

チームメイトの多くは北海道以外の出身者なのですが、彼らによく「北海道の食べ物は本当においしい」と言います。私はずっと北海道で育ってききましたから、そんな話を聞くと改めて「当たり前前においしい物を食べてきたんだなあ」「恵まれたものを食べてきたんだなあ」と実感しますね。

——その「当たり前前においしい物」を作っている生産者としての苦勞、喜びは何でしょう。

内田 収穫までの作業過程は苦しみですね。農業は天候相手。努力が報われないことが多いですね。でも天候に恵まれ、収穫の時に満足できるような品質や収量を得た時はうれしいです。毎年その繰り返しですが最後に報われた時、喜びも大きいです。これは生産者みんな同じだと思います。

ICT農業に明るい未来

——生産現場においては担い手難や労働力不足が深刻です。持続可能な北海道農業に向けた方

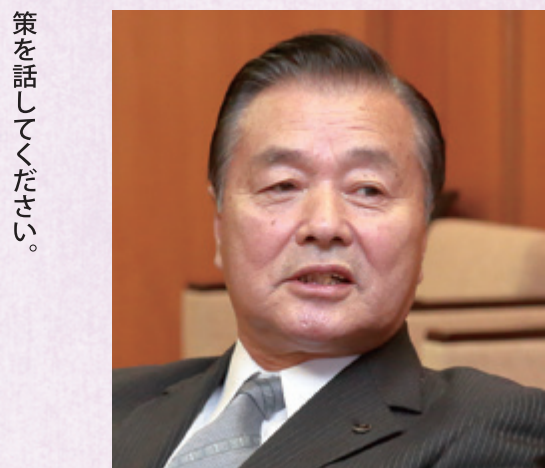
多様な事業展開を進め、その中でこれからの人、将来を担う人材を育て、バックアップしていきたいと考えています。

一方で、日本人の食生活が徐々に西洋化に向かっていくように思います。こうしたニーズを分析して見極め、新しい作物を栽培普及したり、新商品を開発するなどの方策を、もって進めていく必要があると思っています。そのことが後継者、担い手たちの夢につながっていくのだと考えています。

先人に感謝し 次へのステップ

——最後にお二人それぞれ、今年の目標をお聞かせください。

宮澤 今年もJ1上位で戦えるようなチームでありたいということが最大の目標ですし、アジア・チャンピオンズリーグ(ACL)のような大きな舞台にも立ちたい。私たちは北海道を本拠地にしたチームです。その中で新しいサポーター、支援してくれる人をたくさん作っていくことも継続して



内田 和幸

ホクレン農業協同組合連合会
代表理事会長

1949年長沼町生まれ。2004~14年JAながめ代表理事組合長。10~14年ホクレン農業協同組合連合会理事、14~17年JA北海道中央会副会長、17年6月から現職。北海道酪農学園大学短期大学卒。

策を話してください。

内田 われわれ北海道の農業者は、国民の食料を担っているのだという自負と誇りを持っています。が、「農業には将来性がある」「未来が広がっている産業なんだ」という認識をさまざまな機会を通じてアピールしていかなければいけませんし、その環境づくりが大切だと考えています。

昨年7月、帯広市で4年に1度の国際農業機械展が開催されました。最先端技術を駆使した目を見張るような大型農業機械や無人で稼働するロボットトラクターなどが展示公開されました。ドローンなどもそうですよ。未来のものだと考えていた農業用機

やっていきたい。そのためには勝つことがとても重要なのです。サポーターの声援には、私たち選手の間を押ししてくれる魂のようなものが宿っているのです。結果を出すことによってメディアも取り上げてくれる。そのためにはピッチで勝つための努力を続けたいですね。

内田 現在の北海道農業が、幾多の先人たちの血のにじむような努力と汗によって築かれたことは論を待ちません。その中でホクレンは4月、創立100周年を迎えます。1世紀も続いたという事実は、北海道農業の中で、ホクレンが大きな役割を果たしてきたからだということに、強い自負

械、いわゆる「ICT農業」「スマート農業」を担ってくれるものが、既に実用化の段階に入っていることが目の当たりにでき、証明もされたと思います。

農業はまだまだ労働者に負荷が掛かる産業です。しかし、これらの最先端技術を前面に打ち出し、担い手たちがこれらを使って農業に取り組み、その負荷から解放されることとなる。

もちろん地道な努力、長い歳月が必要です。しかし、後継者、担い手に夢を持ってもらわなければいけないし、その中で農業の大切さ、食料生産の大切さも知ってもらわなければいけない。さまざまな機会を通じて「これ

を持つております。先人たちに感謝の誠をささげ、恩に報いるすべは、北海道農業をどう進化させるか、次の世代にバトンタッチしていくのか、だと考えています。

今年第13次中期計画のスタート年でもあります。われわれが掲げる三位一体の事業展開である「販売」「購買」「営農支援」をさらに充実させ、深化し、組合員の負託に応えていきたいと肝に銘じています。

昨年の試練を組合員と手を携え、乗り越えていきたい。そのことが持続可能な農業に向けたよりどころとなり、先人の労苦に報いることでもあるのだ、と思っ



宮澤 裕樹

北海道コンサドーレ札幌所属

1989年伊達市生まれ。室蘭大沢サッカー少年団、室蘭市立鶴ヶ崎中、室蘭大谷高(現大谷室蘭高)サッカー部を経て2008年、コンサドーレ札幌(現北海道コンサドーレ札幌)に加入。J2だった16年からキャプテンとしてチームをまとめている。

道産流通 REPORT

No.323

千葉県成田市の米屋(株)



「なごみの米屋」ブランド商品の一部

「成田銘菓」の風味支える 道産小豆、大手亡、小麦

千葉県成田市の成田山新勝寺は、全国屈指の参詣者を集める名刹として知られています。その表参道に「なごみの米屋總本店」を構えている米屋(株)の栗羊羹は、参詣土産の定番として長く親しまれ、成田銘菓の代表格になっています。このほか、どら焼きや昨年発売20周年を迎えた「ピーなつ最中」など数々の主力商品の風味を支えているのが、北海道産の小豆、大手亡、小麦。「成田山のお不動さま」と共に歩んできた老舗菓子店の歴史と現状を紹介します。

「伝統は築き続けるもの」

千葉県北部の成田市は、1000年を超える歴史を有する成田山新勝寺の門前町として栄え、現在も多くの参詣者を集めている一方、日本の空の玄関口である成田国際空港を市域南東部に抱えていることから、外国人旅行者の立ち寄りが多い観光都市としても知られています。

JR成田駅から新勝寺へと延びる約800mの表参道は、古き門前町の面影をとどめる土産店や、うなぎ料理などの飲食店が150店以上も立ち並び、平日でもかなりのにぎわいを見せています。

その参道の中ほど、上町と呼ばれる界隈で、ひとときわ目



諸岡 良和 社長

創業者が考案した栗羊羹

もともと諸岡社長の先祖は、この門前町で米穀や雑貨を扱う商家だったといえます。「米屋」の名もそれに由来し、顧客が親しみを込めて「こめ

を引く広い間口の店舗を構えているのが「なごみの米屋總本店」。玄関口には、昨年発売20周年を迎えた主力商品「ピーなつ最中」をアピールする売り場が設けられ、広々とした店内には伝統の羊羹や各種和洋菓子のショーケースが整然と並んでいます。

今年、創業120周年を迎える老舗ですが、2015年に40歳代の若さで5代目トップに就任した諸岡良和社長は、「伝統は守るものではなく、築き続けていくものだ」と思っています。これまでの伝統を、さらに深化、拡大させていくことを目指しています」と言葉に力を込めます。

や」ではなく「よねや」と呼ぶようになったのだと伝えられています。

菓子店としての創業は1899(明治32)年。諸岡社長の曾祖父にあたる長蔵氏が、新勝寺の精進料理にあつた栗蒸し羊羹の原型「栗羹」にヒントを得て、地元の芝栗を煉り込んだ羊羹を商品化したのが始まりで、これが日本で最初の栗羊羹だったともいわれています。

その後、米屋の栗羊羹は成田参詣の土産として定着。戦後間もない1945年に(株)米屋本店として法人化し、50年に2代目社長に就任した諸岡社長の祖父、謙一氏が、缶入り水羊羹を初めて開発するなど業容を拡大したのです。

「なごみの米屋總本店」から車で15分ほどの工業団地に、現在の主力工場となっている第二工場を開設したのも謙一氏で、これにより羊羹、どら焼きなどの量産体制を確立。90年には現社名とし、諸岡社長



「なごみの米屋總本店」の外観



米屋(株)
〒286-0032
千葉県成田市上町
500番地
☎0476-22-1211



1. 伝統を受け継ぐ栗羊羹 2. 主力商品の一つになっている「なごみどら焼」 3. 昨年、発売20周年を迎えた「ぴーなつつ最中」 4. 「なごみの米屋總本店」の店内



1. 「ぴーなつつ最中」の製造ライン 2. 煉釜に入れられる羊羹原料 3. 羊羹の充填機

の父親の孝昭氏、叔父の靖彦氏へと経営トップの座が受け継がれてきたのです。

「なごみの米屋」ブランド

同社は現在、大手コンビニチェーンやスーパーのPB（プライベートブランド）商品などの製造も受託しており、そうした全国展開の卸し商品に対して、県内を中心に小売販売する商品には「なごみの米屋」というブランド名を冠しています。

「当社商品の三つの柱の二つが、創業時から続く栗羊羹とそれをベースにした各種羊羹で、これは金看板の商品といえます。もう一つは着実な伸びを示している『ぴーなつつ最中』で、新たな千葉銘菓にな



海保 宏 執行役員

的にほとんどが北海道産です」と購買担当の海保宏執行役員は説明します。

また、「ぴーなつつ最中」の餡は、北海道産の小豆や大手亡などを使用した餡に、ピーナツの甘煮を練り込んで作るほか、「なごみの米屋」ブランドのどら焼きの餡にも北海道産の小豆を使用、生地には「きたほなみ」を中心とした北海道産の小麦が使われているのだといいます。

小豆の作付け拡大に期待

「当社では戦前から北海道産の豆を調達していたという記録も残っているほどで、北海道産の原料なしに『なごみの米屋』の菓子は成り立ちません」と語る海保執行役員は、戦後、同社を大きく発展させた2代目社長の謙一氏が健在だったころの、こんなエピソードを教えてくださいました。

「工場巡回で小豆が一粒落

りつつあると自負していますし、どら焼きをはじめとする焼き菓子も、主力商品に位置付けています」

こう語る諸岡社長は「このほかの『なごみの米屋』ブランド商品についても、パッケージングを重ね、将来的には千菓といえ当社のお菓子と言われたいような地方銘菓に育てていきたいですね」と付け加えます。

また、成田国際空港のお膝元の菓子店として、シンガポールや香港など海外での和菓子需要の開拓にも力を入れており、「まだまだ調査は必要ですが、当社商品を知っていただくことで、来日時に立ち寄ってくれる海外の方を増やすことができなかと考えています」と、外国人客の取り込みにも意欲を見せます。

どら焼き生地に道産小麦

同社は手作りの和生菓子や

ちているのを見つけた2代目社長は、ものすごいけんまくで怒り、こう言ったのです。「一生懸命作ってくれた生産者の方たちに申し訳ないじゃないか。絶対に無駄にするな」とね。原料を粗末にはしてはいけないという教えは今も社内生きています」

そんな海保執行役員の最近の悩みは、国産原料の中でも、栗や寒天などの調達が次第に難しくなっていること、さらには小豆も手に入りにくくなると、日本の食の伝統文化でもある和菓子が作れなくなってしまう。北海道の生産者の皆さんには何とか作付けを増やしていただきたいというのが正直な思いですね」と厳しい表情で語ります。

初心を忘れず120周年

創業120周年を迎える同社は今年、記念商品の開発や各種プロモーションの展開

最高級羊羹などを「なごみの米屋總本店」に隣接する本社工場で、それ以外の羊羹、どら焼き、「ぴーなつつ最中」などを量産体制が整っている第二工場が生産していますが、ここではそのうち、第二工場での羊羹の製造工程を見てみましょう。

衛生管理の行き届いた工場では、まずきれいに洗った小豆を大釜で煮て、煮上がった豆を製餡機で餡と皮に分けます。餡は何回も水にさらし、アクのない良質のさらし餡にします。さらに、そのさらし餡に砂糖などを混合した羊羹原料と、溶かした寒天を煉釜に入れてまろやかな羊羹に練り上げ、自動化された充填機で1本1本詰めていきます。

同社の代表的羊羹の「極上大棗羊羹」には、こし餡の「本煉羊羹」、軟らかく煮た栗を練り込んだ「栗羊羹」、粒餡の「大納言羊羹」がありますが、「その原料となる小豆は基本などを予定。「初心に立ち返り、お客さまとの絆をさらに強める機会にしたいですね」と語る諸岡社長は、最後に北海道の生産者に、こんなメッセージを寄せてくれました。

「私自身、北海道の圃場は何度も訪れており、生産者の皆さんの大変さはよく分かっているつもりです。だからこそ、私たちも大切にに使わせていただいていますので、何とかこれからも安定供給をお願いしたい。当社は原材料の生産者と共に歩む菓子屋でありたいと思っています」

本号が発行されるころ、新勝寺へと向かう参道は初詣客でにぎわい、「なごみの米屋總本店」も1年で最も忙しい時を迎えていることでしょう。その店頭から北海道産原料を使った菓子が、関東圏各地の家庭へと運ばれ、新春の笑顔をもたらしている。そう想像するだけでも、何やらうれしい気持ちになってきます。

成田山新勝寺

深い信仰の歴史伝える大本山

10世紀中期の開山と伝えられる成田山新勝寺は、真言宗の開祖である弘法大師空海が自ら彫り上げたと言われる不動明王を本尊とする真言密教の大本山で、「成田山のお不動さま」などと親しみを込めて呼ばれ、広く信仰を集めています。

表参道をたどって行き着く総門(写



真①)は、高さ約15mの総ヒノキ造りで、荘厳な雰囲気を出しています。広大な境内には、金剛力士像がある仁王門、大本堂、三重塔、釈迦堂、平和の大塔などが点在し、広々とした

庭園が四季折々の景観を楽しませてくれることでも知られています。

また、歌舞伎の初代市川團十郎ゆかりの寺でもあり、市川家の屋号が「成田屋」であることから、同寺との関係の深さがうかがえます。



「なごみの米屋総本店」がある表参道には、店先でうなぎをさばく料理店や、老舗旅館、土産品店などが軒を連ね(写真②)、道路の両脇の所々に置かれた可愛い亀や干支の石像が参詣者を和ませてくれます。

お不動さま旧跡庭園

「不動の大井戸」や創業者像も

「なごみの米屋総本店」敷地内の成田羊羹資料館からやや離れた一角に、米屋(株)が清浄な地として受け継いでいる「お不動さま旧跡庭園」(写真③)があります。

同庭園の案内板などによると、新勝寺は室町時代中期以降、戦乱などにより伽藍も荒れ果ててしまった時期があり、諸岡家の先祖が本尊を自分の屋敷内に遷して奉仕したことがあったのだといえます。

その本尊を安置したとされる場所



に整備したのが同庭園で、園内には記念碑のほかに、本尊に毎朝供えた霊水が湧いていたとされる井戸を復元した「不動の大井戸」(写真④)、さらには、その水資源をお守りいただくよう建立した「平成水守り不動尊」や、米屋創業者の諸岡長蔵氏の胸像(写真⑤)などがあります。

本来の大井戸は埋まってしまっているものの、「湧水洗心」の額が掲げられた現在の「不動の大井戸」は、かつてと同じ水脈から水が湧き出ており、わざわざそれをくみに訪れる地元住民もいるほど。毎年春にはここで、表千家成田市茶道会による茶会も開かれているのだといえます。



道産流通 REPORT

とばれ話

なごみの米屋 編

成田羊羹資料館

米屋と羊羹の歴史を展示で紹介

「なごみの米屋総本店」の裏手に、米屋(株)が運営する「成田羊羹資料館」があります。同社の歩みと、羊羹の歴史や文化を分かりやすく伝える全国的にも珍しいユニークな施設で、総本店の改装に合わせ2002年にオープンしました。

洋館風の建物の内部は、大正時代の商家の雰囲気を漂わせており、1階は企画展示、2階は常設展示スペース



2階の常設展示スペース



かつての羊羹作りの道具も展示

になっています。2階の展示は、羊羹そのものの歴史や、米屋とその商品の歩み、同社創業者の諸岡長蔵氏の紹介コーナーなどに分かれ、明治、大正時代に使われていた羊羹作りの道具や、原材料なども並べられています。

圧巻なのは、全国の菓子店や、同社の歴史



「成田羊羹資料館」の外観

的な羊羹のパッケージコレクションで、「明治末期から大正初期にかけて成田山の参道には羊羹屋が二十数軒あり成田は羊羹の町でした」という解説と共に、その当時の各店の羊羹の包装もズラリと並べられています。



かつての米屋の羊羹パッケージの展示

創業120周年を迎える老舗だけに、商品の包装の変遷や、往時の店舗写真なども見応えたっぷり。1階には、映像コーナーのほかに、同社に古くから伝わる恵比寿さま、大黒さまをまつた「おみくじ」(1回100円、羊羹付き)コーナーなどもあります。

開館時間は午前10時から午後4時まで。休館日は展示替えの時のみの不定休で、入館は無料。「なごみの米屋総本店」内を通り抜けて行き着く、隠れた立ち寄りスポットになっています。

伝統息づく羊羹の極致

「なごみの米屋総本店」の店内のひとときを引くショーケースに、「なごみの米屋」ブランドの羊羹の最高峰ともいえる「宵紫」が置かれています(写真)。

最上級の北海道十勝産小豆、最高純度の氷砂糖、国内産テングサを100%使用した寒天などを使い、同社が誇る職人が丹精込めて作り上げる逸品。価格は1万円(税抜)で、5日前までの予約が必要です。

その他の「なごみの米屋」ブランド商品は、千葉県内の直営店や百貨店・スーパーのインスタア店など約30店で取り扱っているほか、オンラインショップでも入手が可能です。詳しくは、同社のホームページをご覧ください。



【「なごみの米屋」ホームページ】

<http://www.nagomi-yoneya.co.jp>

【オンラインショップ】

<http://www.eshop-yoneya.com/shop/>

今月のプレゼント

「なごみの米屋」極上羊羹 3本詰

「極上本煉羊羹」
「極上栗羊羹」
「極上大納言羊羹」
(400g各1本)



応募方法は33ページに

ホクレン食と農のふれあいファーム「くるるの杜」では、さまざまな農作業・調理加工体験プログラムを提供しています。このコーナーでは、その実際の様子を中心に、農畜産物直売所や農村レストランなどの情報も織り込みながら「くるるの杜」の多彩な取り組みを紹介します。



町屋さんの実演に見入る参加者たち

調理加工体験プログラム

オリジナルソーセージできた!

浅野農場(当別町)が初指導

当

別町内で
SPF豚

を肥育する一方、その豚肉で製造したハムやソーセージを町内の直営店「スマイルポーク」などで販売している(有)浅野農場の総務部長、町屋裕二さんを初めて講師に迎えた調理加工体験プログラム「オリジナルソーセージ



ゆで上がったソーセージを早速バクリ



見事な仕上がりに満足そうな参加者

を作る」が昨年11月23日の午前、午後の2回、開かれました。

参加したのは、両回合わせて72人の親子らで、まず町屋さんが「SPF豚」というのは、特定の病原菌を持たない健康な豚のこと」と説明。ソーセージが日本に伝わったのは大正時代であることなどをクイズを通じて紹介しました。

参加者らが調理したのは、北海道産SPF豚のひき肉や玉ねぎを天然

の羊腸に詰めて作るウインナーソーセージ。子どもたちの中には、玉ねぎをすり下ろすうちに涙が止まらなくなる子や、すった玉ねぎ、しょうがを加えたひき肉に砕いた氷を入れてこねる作業では、「冷たい!」と何度も声を上げる子もいるなど、調理室は

J A 今金町青年部

「今金男しゃく」対面販売 詰め放題イベント大人気

J A 今金町青年部は昨年11月23日、同町特産の馬鈴しょ「男爵薯」などの対面販売を農畜産物直売所で実施し、詰め放題イベントなどを通じ、首都圏の市場でも高い評価を得ている「今金男しゃく」を札幌市近郊の消費者らに売り込みました。

販売したのは、「今金男しゃく」や、それを原料にしたポテトチップス(うすしお味、のり塩味)、同町産の小豆、大豆で、同青年部の宮本翼部長らメンバー5人と、同JA営農部農業経営課職員の吉田哲也さんが、明るく陽気な呼び声で、おいしい馬鈴しょをアピールしました。

特に人気が高かったのが「今金男しゃく」の詰め放題販売。1袋に14、15個ほどは詰めることができ、1回300円の格安提供とあって、昼過ぎには、詰め放題のために用意した50kg以上の馬鈴しょが無くなってしまったほどでした。

「数日前に、テレビ番組の『おいしいQ.くるる』(ホクレン提供)で「今金男しゃく」が紹介されたこともあって、「これ



「今金男しゃく」を売り込んだ青年部メンバーたち

を買うために来た」と言ってくださるお客さまが何人もいて驚きました。祝日なので家族連れの方たちも多く、詰め放題も楽しんでいただけたようので、よかったです」と吉田さんはうれしそうに話していました。

お知らせ

農村レストランは店内設備工事のため、1月28日(月)から2月4日(月)まで臨時休業させていただきます。

ホクレン 食と農のふれあいファーム
くるるの杜

www.hokuren-kururu.jp
011-377-8700
北広島市大曲 377-1

大きな歓声と笑い声に包まれました。続いて町屋さんが、羊腸に肉を詰めるソーセージメーカーという器具の使い方を実演すると、参加者たちは真剣な表情で見入り、早速、自分たちも挑戦。最初はなかなかうまくいきませんでしたでしたが、くるるの杜スタッフや町屋さんの指導でコツをつかむと、かなり長いソーセージが作れるようになり、途中でねじるなどして思い思いの長さに加工していました。

学3年、秦誠君は「家族全員ソーセージが大好きなので、作ってみたいと思いました。初めての体験でしたが、ソーセージメーカーに肉をギュウギュウ詰めて、しぼり出すのが、ものすごく面白かったし、とてもおいしくできました」と満足そう。地元の小学校でのソーセージ作りの体験授業なども担当しているという町屋さんは「皆さん、楽しんでいただけよう、本当に良かったです。当別町で、こんな畜産物が作られているということ、より多くの方に知っていただけたらうれしいですね」と笑顔で話していました。



楽しそうに加工体験をする子どもたち





CONTENTS

- 16 第29回JA北海道大会
- 18 第67回全道JA青年部大会
- 20 第54回JA北海道女性大会・北海道家の光大会
- 22 北海道米の新ブレンド商品「合組」お披露目
- 22 JAグループ北海道農業経営フォーラム
- 23 農協法公布記念式典
- 24 全日本実業団対抗女子駅伝
- 24 ホクレン総合職研修講師に神尾誠JA道青協副会長

今月のシーン どう、イケてるでしょ？

北海道農協青年部協議会の第67回全道JA青年部大会が昨年12月、札幌市内で開かれ、全道各地から約850人が参加しました。恒例の「純農Boy北海道オーディション」では、各地区の代表がパフォーマンスも披露し、会場を盛り上げました。(詳しくは18、19ページで)

手を掛けなければ結果も出ない

「手を掛けた分の結果が待っているのが農業。そこが喜びであり、怖さでもあると感じるようになりましたね」

比布町に近い、旭川市東鷹栖の農家の長女として育ちました。専門学校で介護福祉士の資格を取得し、同市内の福祉施設で5年間勤務しました。友人の紹介で、同じ東鷹栖の農業後継者だった加津則さんとの交際が始まるのは、その頃です。

結婚したのは2004年8月です。農作業にもようやく慣れた4年目に待望の長女(小学5年)が生まれ、その後、次女(同3年)、三女(同1年)にも恵まれます。「妊娠、出産、育児のサイクルが続き、合わせて6年間も農作業から離れました。夫や義父母が懸命に働いている姿を間近で見っていたので、子育てのためとはいえ、ちょっと後ろめたい気持ちにもなりましたね」。

2歳になった三女を保育所に入所させた5年前、圃場に復帰します。アルバイトの女性と共にミニトマトやなんばん、ししとうなどの施設野菜の栽培を任されましたが、試行錯誤の連続だったといいます。

「鈴なりになったトマトを見て『わ～、たくさん実った!』って大喜びしたものです。でも摘果しないと栄養が分散して全体の品質が落ちてしまう。そんな(基本的な)ことも知らなかったんですよ」

失敗は工夫につながります。「作業手順や肥料を変えたり…。結果が出るとうれしいし、農業の楽しさを感じるようになりました」。

失敗を糧に凝らす工夫 そこに感じる農家の楽しさ



伊藤 美香さん/JAたいせつ



いとう みか
1978年生まれ。JAたいせつ女性部フレッシュミズ部会長を経て、昨年4月からJA北海道女性協議会フレッシュミズ部会副会長/家族は夫の加津則さんといずれも小学生の長女、次女、三女/経営は水田約37haの他に、ハウスでスイカやミニトマト、野菜苗などを栽培

フレミズはかけがえのない組織

10年に旗揚げしたJAたいせつ女性部フレッシュミズ部会の創立メンバーの一人です。

「結婚してすぐに前身の若妻会組織『麦わら』に入会しました。生まれや育ちは違っても同じ地域に住み同じ農業に携わり、同じ世代として子育てや家事にも奔走。同じような環境で生きる仲間たちとは悩み事も相談し合えます。私、フレミズは若い女性農業者にとってかけがえのない組織だと思っています」

16年4月から2年間、同部会長を務

め、同JA内にある和室で茶話会をほぼ2カ月に1度のペースで開きました。子どもたちも参加できるよう、お昼時に設定し、メンバー各自が得意料理を持ち寄り、テーブルを囲みました。同JA青年部が水田で生育している稲で、動物などを表現する活動「田んぼアート」へのサポート態勢の打ち合わせも、この茶話会で行いました。

「ワイワイ話し合っているとアイデアが次々に飛び出します。青年部員の多くは私たちの配偶者です。夫のことを考えることで夫婦の絆も、いっそう強まったと思っています」

「所得増大」「担い手確保・育成」継続 新たな「協同組合の価値創造」盛る

「力強い農業」「魅力ある農村」実現へ

J Aグループ北海道は昨年11月13日、向こう3年間の針路を



約2400人が参加した第29回JA北海道大会

決める第29回JA北海道大会を札幌市内で開きました。将来ビジョン（メインターム）は、前回大会で設定した「北海道550万人と共に創る『力強い農業』と『豊かな魅力ある農村』を継承。引き続き『農業所得の増大』と『多様な担い手の確保・育成』に取り組むとともに、新たに『時代に即した協同組合の価値創造』などを目指すことを決めました。

同大会には道内のJA、連合会、中央会などの役員や青年部員、女性部員ら約2400人が参加。JA北海道女性協議会（JA道女性協）の青山伸子会長が読み上げるJA綱領に全員が唱和し、3年に1度の大会が幕を開けました。

大会実行委員長を務めたJA北海道中央会の飛田稔章会長は、冒頭挨拶の中で「JAグループ北海道は一大転換期を迎えているが、今回の大会を

通じてしっかりと対策を練ってまいりたい。農業、JAに対する幅広い理解と共感を得ながら、長年にわたり先人が築き上げた北海道農業と農業協同組合の基盤を、さらに発展させていく」などと述べ、意義ある大会となることに期待しました。



議案を上程するホクレンの内田会長

続いて、来賓を代表して北海道の高橋はるみ知事、北海道経済連合会の高橋賢友会長、北海道生活協同組合連合会の麻田信二会長がそれぞれ挨拶。JAふらのの植崎博行組合長を議長に選任し、議事に入りました。

議案上程は、ホクレンの内田和幸会長が務め、前回大会からの継承となる議案第1号の「協同組合の価値創造」について、来賓を代表して北海道の高橋はるみ知事、北海道経済連合会の高橋賢友会長、北海道生活協同組合連合会の麻田信二会長がそれぞれ挨拶。JAふらのの植崎博行組合長を議長に選任し、議事に入りました。

の増大』と『多様な担い手の確保・育成』を実現』では、①農業所得の増大に向けた取り組みの加速②担い手を育み支える地域活動の実践―を基本目標としていることなどを説明しました。

また、新たに盛り込まれた議案第2号の「次代につなげる協同組合の価値と実践」についても、基本目標に掲げた①時代に即した協同組合の価値

創造②食と農でつながるサポーター550万人づくりの拡充―について、その実現に向けた重点取組事項なども含めて説明しました。

さらに議案第2号に関連して、「JAグループ北海道が考える『新たな協同組合』の姿」について継続討議していくことを提案。「新たな協同組合」とは、組合員の多様な価値観やニーズを包含した中で、その結集軸となることで、持続可能な農業と地域社会の発展に貢献することが出来る協同組合―と位置付け、JAグループ北海道全体で、その姿を今後も追求していくとしました。

これらの議案に対し、JA大樹町の坂井正喜組合長、北海道農協青年部協議会（JA道青協）の村田辰徳副会長、JA道女性協の高野幸子副会長が賛成の立場で意見表明。続いてJA道青協の今野邦仁会長が、「各議案について、組合員・JA・連合会・中央会が、各役割を再確認するとともに、一丸となって決議事項の実践を通じて自己改革に取り組み」などとする大会決議案を読み上げ、満場の拍手で採択しました。

このほか「災害からの復旧・復興と持続可能な北海道農業の確立に向けた特別決議」案を、JA北海道厚生

連、JA共済連北海道の西一司会長が上程し、大きな拍手で採択。JA北海道信連の佐藤彰会長の閉会挨拶で大会を締めくくりました。

北海道生協連

胆振東部地震で被災した 農業者らに支援金1億円

JAグループ北海道と相互連携協力協定を結んでいる北海道生活協同組合連合会は、昨年11月13日の第29回JA北海道大会に合わせ、北海道胆振東部地震で被災した農業者らに対する支援金1億円を同グループに贈りました。

北海道の農畜産物を購入している、コープさつぽろなど全国の生協組織、組合員から寄せられた支援金の一部で、大会前に行われた贈呈式で、北海道生協連の麻田信二会長がJA北海道中央会の飛田稔章会長に目録を手渡しました。

飛田会長は、大会挨拶の中でこの支援金贈呈についても触れ、「消費者の皆さんのお気持ちに込めるべく、早期の復旧・復興を果たし、食料基地としての役割、使命を果たしていく」と感謝の言葉を述べました。

パネルディスカッション

「新たな価値創造」テーマに 3氏が協同組合の在り方論議

JAグループ北海道は、第29回JA北海道大会に先立ち、「多様化する組合員ニーズに対応する新たな協同組合の価値創造」をテーマに、パネルディスカッションを開催、日本協同組合連携機構の青竹豊常務（株）農林中金総合研究所の行友弥顧問・特任研究員、JA北海道中央会の小野寺俊幸副会長が、協同組合の今後の在り方について意見を交わしました。

大会議案に盛り込まれた「新たな協同組合の価値創造」について



協同組合の将来像について意見を交わしたパネルディスカッション

て論議を深めるきっかけにしてもらうのが狙い。北海学園大学の宮入隆教授がコーディネーターを務めたディスカッションでは、組合員について「単にサービスの受け手というのではなく、直面している課題は自分たちで解決していくのだという流れを作ることが大切」准組合員と正組合員の垣根を低くし、協力し合う関係を築いていくことが必要」などの意見が出されました。

また協同組合間の連携については「まず、違う協同組合同士で人間関係を作っていくことから始めてほしい。『ゆるやか』『相乗り』『やつてみる』がキーワード」などのアドバイスもあり、最後に宮入教授が「協同組合に集まるからこそできることを、しっかりと整理することが、新たな価値創造につながるのでは」とまとめました。

先人に学び 食料基地の使命果たす

参集の盟友850人が力強く決意

北 北海道農協青年部協議会（JA道青協）は、第67回全道JA青年部大会を昨年12月6、7の両日、札幌パークホテルで開催しました。全道各地から「盟友」約850人が参加し、2019年の活動に向けた大会宣言などを採択しました。



「苦難を克服した先人の歴史に学ぶ」などと挨拶する今野会長

今年の大会テーマは「Exciti ng Innovation」農力全開！です。開会式では、冒頭に北海道胆振東部地震で亡くなられた方々へ黙とうをさされた後、JA道青協の今野邦仁会長が挨拶。「北海道は地震や台風などの災害が相次いだが、全国の盟友から温かい激励と支援をいただいた。青年部の持つネットワークの広さとフットワークの軽さ、さらに協同組合精神の素晴らしさを改めてかみしめる1年だったと思います」とし、「先人が苦難を克服し、今日を築いてこられた歴史を踏まえ、われわれは、青年部事業を通じて厳しい農業情勢を打破。持続可能な北海道農業の確立に向け、総力を挙げてまい進

上とその魅力を語れる人はいません。いろいろな活動を通して、北海道農業の魅力を発信してください」とエールを送りました。

その後、本大会で今野会長がJA道青協としての「大会宣言」を上げ、日胆地区の佐藤啓大会長が「持続可能な北海道農業の確立に向けた特別決議」を提案、それぞれ満場の拍手で採択されました。

大会宣言は「協同の力で『農業所得の増大』と『多様な担い手の確保・育成』を実現」の他、「次代につなげる協同組合の価値と実践」を掲げ、食卓への糧を安定的に供給する責務を果たし、力強い農業と豊かな魅力ある農村の実現に向けて強く決意する、などとして

まためました。

続いてHBCのテレビ番組「あぐり王国北海道NEXT」に出演している森結有アナウンサーが「若手農業者へのメッセージ」と題して講演。豊頃町の酪農家宅にホームステイした酪農教育ファームの体験を基に「生産者さんは牛たちに限らない愛情を注いでいることが分かりました。農業はカッコいい職業です。そして皆さん以

また特別決議は、北海道胆振東部地震によるブラックアウトを踏まえ、安定的な電力確保の実現、再生可能エネルギーや予備電力支援に向けた提言が「未来の農業につながる」とし、「北海道550万人から信頼され、わが国の食料基地としての使命を果たしていく」と結んでいます。



力を込めて「カンパロー！」を三唱するJA道青協役員たち

また特別決議は、北海道胆振東部地震によるブラックアウトを踏まえ、安定的な電力確保の実現、再生可能エネルギーや予備電力支援に向けた提言が「未来の農業につながる」とし、「北海道550万人から信頼され、わが国の食料基地としての使命を果たしていく」と結んでいます。

しましよう」と力強く呼び掛けました。

初日は各地の代表6人ずつが出場した「平成30年度全道JA青年の主張大会」と「第44回全道JA青年部活動実績発表大会」を開きました。

青年の主張はJAしずない青年部の田島義晴さん、青年部活動実績発表はJAたいせつ青年部の外川光さんがそれぞれ最優秀賞を受賞しました。2人は1月23、24日に福島市で開催される東北・北海道ブロック大会に、北海道代表として出場します。

また、農業に熱い情熱を傾ける盟友を選ぶ「純農BOY北海道オーディション」が行われ、JAようてい青年部の大浦翔平さんがグランプリ、JA本別町青年部の河野綜太さんが準グランプリに輝きました。同日は「農の魅力発信」ポリシープックの有効活用、「外国人技能実習制度について」などの五つの分科会も開かれ、参加者が研さんを深めました。

7日は農政ジャーナリストでフ



約850人が参集した全道JA青年部大会

リーアナウンサーの小谷あゆみさんが「北海道農業の果たす役割」の演題で基調講演をしました。

農林水産省食料・農業・農村政策審議会委員を務めている小谷さんは、「北海道農業を未来へつなぐには、正しい農業より楽しい農業です。そして楽しく愉快的な農業にするのは、あなたたちです！ 私も550万人サポーターの一人として応援しています」と

最優秀賞の要旨と評価

「青年の主張」田島義晴さん 「青年部活動実績発表」外川光さん

▼青年の主張の田島さん（JAしずない）のテーマは「大地に根を下ろす」です。サラリーマンとして2014年に、札幌から新ひだか町静内に転勤しましたが、札幌に住む長兄の行動に深く関わっていく中で、知的障害があつたことが判明します。

田島さんは静内での就農を決意し、17年3月に勤務先を退職。農業研修生としての新たな道を選択しますが、その中で、JAのバックアップを受け、青年部活動にも積極的に参加。さらに長兄を呼び、一緒に農作業もしています。目標は「自分なりの農

福連携」だと言います。審査員は「ひたむきに農業の可能性を模索している姿に感銘を受けた」と高く評価しました。

▼青年部活動実績発表（JAたいせつ）の外川さんは、青年部が06年に始めた活動「田んぼアート」に関する「Make a smile」絆が繋いだ物語」がテーマです。さまざまな色の苗を植え、水田に動物などの絵を描く活動にとどまらず、田んぼアートの全国大会を誘致したり、イベント「田んぼアートフェスティバル」の開催にこぎつけるまでの過程などをアピールしました。講評では「田んぼアート



農福連携などについて発表する田島さん



田んぼアートの進化過程を紹介する外川さん

活動の進化の様子が手に取るように分かった」と絶賛されました。

「仲間づくり」「次世代リーダー」 今後の取り組みテーマに意見交換

J A北海道女性協議会（JA道女性協）は昨年11月8、9の両日、第54回JA北海道女性大会・北海道家の光大会を札幌市内のホテルで



開き、参加した全道の女性部員約550人が、体験発表や意見交換などを通じ、今後の女性部活動の活性化に向けた課題や、果たすべき役割について話し合うとともに交流を深めました。

冒頭、主催者挨拶に立った青山伸子会長は、JAひがし宗谷女性部フレッシュミズ（フレミズ）の大石菜央さんがJA全国女性組織協議会のフレミズ活動作文コンクールで優秀賞を



活発な意見が交わされた大会（上）と、進行役を務めた青山会長

受賞したことなどを報告した後、「この大会が皆さまにとって実りあるものになることを祈念しています」などと述べ、有意義な大会となることを期待しました。

初日は6地区の代表者による家の光記事活用体験発表や、戦前・戦中をたくましく生きた農村女性の姿を描いた映画「荷車の歌」（1959年作品）による学習会も実施。二日目の本大会では、「仲間づくりと学習を通じた次世代リーダーの育成」をテーマに意見交換しました。

その中で「仲間づくり」の課題の一つとして、女性部活動に理解を示す非農業者女性や准組合員女性を部員や役員として受け入れることの可否を問う発言があったのに対し、参加者たちは、自分たちの地域での経験を元にさまざまな事例を紹介。「やはり部長など役員は農業

経験者にすべきでは」「部員や役員となり手がいない状況は、都市地域の女性部では特に深刻。農業者に範囲を限定しては、組織が成り立たなくなってしまう」などの意見が出され、助言者として出席したJA北海道中央会の石田健一参事は、「地域ごとに、それぞれの実情に見合った女性部の形を、地元JAと話し合いながら作り上げていくことが必要では」とアドバースしました。

また、「次世代リーダーの育成」に関連して、フレッシュミズの重要性を指摘する意見が多く出され、「女性部の側から、もっと交流を求めていくべき」「女性部の人たちは怖いと思われるようなところもあるようだが、そんなことはないのだということを、私たちの側から示していかなければならない」などの発言が相次ぎました。

わっていない。これからも、どんな意見を出していただき、女性協はそれに一丸となって対応していきたい」と語り、意見交換を終了。最後に①「食」と「農」の大切さを次世代につなぐ②「学習」「対話」「発信」を通じて活動の輪を広げる③女性組織としての社会貢献活動と情報発信を实践する一を柱とする大会申し合わせを満場一致の拍手で確認し、大会を締めくくりました。

『家の光』記事活用体験発表

JA豊頃町女性部の川口さんが最優秀賞

今回の大会の初日に開かれた、月刊誌『家の光』記事活用体験発表では、「思いをつなぐ」をテーマに発表したJA豊頃町女性部長でJA十勝地区女性協副会長の川口亜矢子さんが最優秀賞を受賞しました。

川口さんの発表は、JA女性部の運営や企画を担う役員になって以降、女性部がなぜ食育や環境問題、福祉活動に取り組むのかについて『家の光』を教科書に勉強。女性部活動の原点と意味を理解したことで自身の思いや活動が変化したことなどを、具体例を挙げて紹介しました。



賞状を受け取る川口さん

川口さんは「他の皆さんの発表が素晴らしいかったですので、私でいいのかと、本当にびっくりしました」と受賞の喜びを語り、北海道代表として発表する今年2月の全国家の光大会に向けて「中途半端な気持ちではいけない」と気を引き締めています。何歳になっても成長できる場が女性部にはあるのだということを伝えたいと思っていま

す」と意欲を見せていました。優秀賞を受賞した他の5人の発表者は次の通りです（カッコ内はJA名）。
▽佐藤美奈子（とまこまい広域）▽松本秋子（新しのつ）▽栗原明美（北いぶき）▽広富美恵子（当麻）▽片桐紀子（ひがし宗谷）

「ジョイライフ」取扱の作業着、化粧品を紹介

ホクレンは、第54回JA北海道女性大会・北海道家の光大会の二日目、個別宅配事業「ジョイライフ」で扱っている農作業着や北海道産大豆、小豆を使った化粧品などを大会会場の出入口フロアに設置した特設コーナーで展示し、休憩時間中の参加者らに試用、試着などを通じて特長などを紹介しました。

展示した化粧品は、北海道産大豆を原料にした「ソイミルクハンドクリーム」と、北海道産



関心を集めた道産大豆、小豆を使った化粧品の紹介コーナー

小豆を使用した「ancoco」ブランドの美容液とせっけん。いずれも昨年（2018年）秋から取り扱いを始めた商品で、女性部員たちは興味深そうに使用感などを試していました。また女性向け作業着の人気商品となっている「monkuwa」ブランド商品のほかに、「2019きやろつと&フルフィル」春号から取り扱いを始める同ブランドの姉妹品で「I am a farmer」のつなぎ服やTシャツなども展示、多くの女性部員たちが手に取るなどして品質を確かめていました。

ブレンド米「合組」お披露目

マツコさん 新米発表会で食味絶賛



新商品「合組」をPRするホクレンの内田会長(右)とマツコさん

ホ

クレンと北海道米販売拡大委員会は昨年11月7日、北海道産の新米発表会を東京都内で開き、2018年産から販売する北海道米の新ブレンド商品「合組」を紹介しました。

18年産の北海道米は夏場の日照不足もあって作況指数90の「不良」でした。ホクレンは北海道米の市場シェアを維持するなどの目的で、「合組」の販売を決めました。

18年産については認定基準に満たなかった「ゆめぴりか」と「ふっくりんこ」を9対1の割合でブレンド、双方の長所を引き出したほど良い甘さと冷めても粘りがあることが特長で、取引先と協議しながら店頭販売を順次進めていく予定です。

また、19年産以降も「ゆめぴりか」を

はじめとするブランド米を最適な配合内容にした商品「合組」として、販売できる可能性を模索していく考えです。

発表会でホクレンの内田和幸会長は、「安全安心でおいしい北海道米をお届けできるような努力していきます」と挨拶しました。続いてCMのキャラクターとしておなじみの人気タレント、マツコ・デラックスさんが炊きたての「合組」を試食。「味はとってもいいけど、名前(合組)がよくないわ」と感想を述べた後、「でも名前が悪くてもヒットすることよくあるのよね」とフォローしました。

ホクレン主食課の熊谷和也課長は「競争の激しい道外市場で、ブランド力を下げない商品を提供し続けていく、今後の戦略の一つにしたい」と力を込めました。

諸先輩の成果、さらに深めよ

内田会長が役員に期待

農協法公布記念式典

ホ

クレンは昨年11月19日、第71回農協法公布記念式典を札幌市のホクレンビルで行いました。内田和幸会長は本所役員に対し、「長年にわたる農協運動を振り返り、これからの時代の農業、農協運動はどうあるべきか、原点に立ち帰って考えてほしい」と挨拶、ホクレンが創立100周年を迎える2019年を機に、諸先輩が積み重ねてきた成果を、さらに深め、より発展させていくことを求め

ました。

式典では、出席者全員でJA綱領を唱和した後、ホクレン全体で80人の永年(25年)勤続者のうち、札幌近郊勤務の50人と、業務表彰2件の代表者に表彰状を贈りました。

【会長挨拶の概要】

本日は長年にわたる農協運動を振り返り、これからの時代の農業、農協運動はどうあるべきか、原点に立ち返って、役員一人一人が真剣に考える意義深い一日であります。

農協法は昭和22年11月19日に公布され、その後、全国各地に誕生した農業協同組合は、相互扶助の

JAグループ北海道農業経営フォーラム 待遇や「聞く耳」が重要

人材育成の拠所を学ぶ

J

Aバンク北海道が主催する「JAグループ北海道 農業経営フォーラム」が昨年11月7日、札幌市内のホテルで開かれ、北海道内の農業経営者や農業団体関係者ら約270人が、次世代の農業経営者の育成に取り組む長野県の農業法人(有)トップリバー代表取締役の嶋崎秀樹氏と、松下政経塾の塾頭、常務理事などを歴任した志ネットワークの上甲晃氏の講演に聞き入りました。

JA北海道中央会とホクレンが共催し毎年開催しており、今年で8回



人材育成のポイントなどを学んだフォーラム

目。冒頭、主催者あいさつに立ったJA北海道信連経営管理委員会の佐藤彰会長は「本フォーラムを経営力強化に向けた活動の指針としていただければ幸い」と語りました。

今回のフォーラムは、人材育成をテーマにしており、高原野菜の生産、販売事業を通じ、次世代を担う農業経営者の育成に力を注いでいる嶋崎氏は、人に働いてもらうには、十分な待遇を用意する必要があるとする持論を展開、「どんなに機械化しても、どんなICTを使っても、使いこなせる人がいなければどうにもならない」などと語りました。

また上甲氏は、経営の神様と呼ばれた松下幸之助氏の教えをユーモアを交えながら多数紹介。「うまくいくのも、いかならないのも自分の考え次第。苦しい時も、見方を変えればそれがチャンスになる」などと語り、経営者として成功する条件に「人の話をきちんと聞く耳を持つこと」などを挙げました。

精神のもと、幾多の困難を乗り越えながら、組合員の経営と生活の安定を目指し、各種事業を通じ今日まで発展してまいりました。

これは、農協組織に結集いただいた組合員の皆さんの、たゆまぬ農業生産への取り組みと、多くの先輩の努力のたまものであり、本日の農協法公布記念日にあたり、心から敬意と感謝を表したいと思えます。

さて、本年を振り返りますと、2月に発生した日高地方の大雪、夏場の長雨、日照不足、台風、そして9月の北海道胆振東部地震、その後の道内全域にわたる停電など、天候不順や災害が重なり、北海道農業が大きな被害を受けた1年でありました。

生産者・農協が非常に厳しい状況に見舞われる中、改めてホクレンが果たすべき役割・使命とは何かを問われる1年でもあったと思えます。

(昨年)10月の理事会で決議されました、ホクレンとしての災害対策は、役員が一丸となって知恵を出し合い、合意形成を重ねた上で、生産者に寄り添い、一体感をもって営農を支えていくための方向づけができたものと考えております。

また震災対応では、苫小牧支所の皆さんをはじめ、本所、各支所、事業

所で働いておられる多くの職員の皆さんが、ご本人、ご家族の方々が被災した環境下でも、誠実かつ迅速な調整により復旧活動にあたっていただいたと報告を受けております。

職員の皆さんのこうした行動の一つは、協同組合の相互扶助の精神に通じるものであり、一般企業とは異なる、私たちホクレンという組織の大きな強みとして、価値を示した素晴らしい事例だと思います。これらの行動に対して、改めて感謝を申し上げます。

さて、ホクレンは2019年春に創立100周年を迎えることとなります。「協同」の理念に基づき、先輩たちが積み重ねてきた成果を、さらに深め、より発展させていくことは、私たちの組織が、これからも生産者・農協はもとより、消費者の皆さまからも信頼され、選ばれ続けるために大切なことでもあります。

仕事を通じ、より良いホクレンにするためには、どうするべきなのか、また、多くの方々から、事業への理解と信頼を得るためには、何をすべきなのか。役員の方々とコミュニケーションをとっていただくことをお願いし、挨拶とさせていただきます。



記念式典で挨拶する内田会長

厚い壁にはばまれ19位

「行け行け」役職員124人が大声援

ク

イーンズ駅伝 in 宮城 第38回
全日本実業団対抗女子駅伝

競走大会(日本実業団陸上競技連合主催)が昨年11月25日、宮城県の松島町文化観光交流館前から仙台市陸上競技場までの6区間42・195kmで行われました。ホクレン女子陸上競技部は2時間21分53秒のタイムで参加2チーム中19位に終わり、シード権(8位まで)獲得ができませんでした。

ホクレンは1区(7・0km)宮内宏子、2区(3・9km)寺島優奈、3区(10・9km)菊地優子、4区(3・6km)加藤風紗、5区(10・0km)大蔵玲乃、6区(6・795km)河辺友依というメンバーで臨みましたが、終始、苦しい展開となり、上位に食い込むことができませんでした。

応援団は札幌や道内外の支所・支店から参加した124人が6班に分かれ、力走する選手たちに「行け行け!ホクレン!」などと熱い声援を送りました。



2区を力走する寺島選手に大声援を送るホクレン応援団

レース終了後、ホクレンの瀧澤義一副会長は「われわれを全日本駅伝まで連れてきてくれてありがとう。本当によく頑張りました」と選手たちをねぎらいました。長渡憲司監督は「選手たちはよく頑張ってくれましたが日本の壁は厚かった。次回は少しでも順位を上げ期待に応えたい」と決意を新たにしていました。

ホクレン総合職3年目研修

手を携え「豊かな北海道農業」を

JA道青協の神尾副会長が講話

ホ

ホクレンは、本会の総合職3年目の職員34人を対象にした研修を昨年11月28日から30日までの3日間、ホクレン研修センター(札幌市東区)で開きました。2018度から始めたプログラムの「生産者講話」では、北海道農協青年部協議会(JA道青協)の神尾誠副会長が、



総合職3年目研修で講話するJA道青協の神尾副会長

若手生産者の多彩な活動などを紹介しました。神尾副会長は「道内106JAの青年部には、6784人の盟友がおります」とJA道青協の組織構成を述べた後、学校の授業で農と食の大切さを児童・生徒に伝えてもらうため教員を対象に行っている農業体験「農村ホームステイ」や、農業者と消費者を結ぶ目的で各JA青年部が制作している「1分間CMコンテスト」などの取り組みについて分かりやすく説明しました。

その上で「私たち若い世代の生産者も、若いホクレン職員の皆さんも『北海道農業の業界人』。お互いにいろいろな力を磨き、同じ業界人として手を携え、北海道550万人と共に創る力強い農業、豊かな魅力ある農村を築きましょう」とまとめました。

神尾副会長の講話を聞いた岩見沢支所農機燃自生活課の北村豪啓職員は「熱い思いが伝わってきました。職員として生産者に貢献できることを見だしていきたいです」と感想を述べました。

ESSAY

エッセー

「食」を大切にしスター街道

野菜をあまり食べようとしないうちに「野菜も食べなさい!」は、母の口ぐせでした。もしも「無理して食べなくていいのよ」というしつけをされていたら、どうなっただか。今、考えてもゾッとします。

北海道日本ハムファイターズに入団当時、野菜をまったくと言っていいほど受け付けなかった選手が、先輩に「それではスターになれない」と諭され、積極的に野菜を食べるようになったケースもあります。その選手はこのアドバイスと寮での食事指導のおかげでカラダづくりが進み、成績もどんどん向上します。しかし2005年に退寮してから、また食習慣が乱れてしまいました。

朝食はコンビニのパンかファストフード。そんな時、有名な和食店のオーナーで、ミシュランの星を獲得したことのある知人のシェフに相談します。最終的にはオーナーに朝食を作ってもらおうのですが、プロの力

を借りて、食事改善に踏み出したことにより、その選手はファイターズの第1次黄金時代を担う選手になります。

食の取り組みに関して私が注目しているのは、昨年8月に開催された中学・高校生が日本オリンピック委員会エリートアカデミーの選手らと一緒に練習し、食事についても学ぶ「鍛える、食べる トップアスリート1日合宿」です。

全日本卓球選手権大会男子シングルスで史上最年少で制した張本智和選手らと一緒に汗を流し、食事については①米やパンなどの主食、主菜、副菜、牛乳乳製品、汁物の五つをそろえるよう努める②そろわない時は翌日の食事などで補うというアドバイスを受けます。パランスのとれた張本選手の昼食メニューを見て、生徒たちは「いろんな食材をもりもり食べていた」と感心しきりだったそうです。さて、前段で紹介した野菜を受けつけ



はせがわ ゆうじ 長谷川 裕詞

私設応援組織「日本ハムファイターズ応援作戦会議」代表

1969年、社管町久保内生まれ。北海道大学法学部卒業後、リゾートホテル勤務を経て現在、建設コンサルタント会社で総務・人事担当の管理職。趣味は読書とマラソン(北海道マラソン4回完走)。剣道四段の腕前で、秘書検定1級、産業カウンセラーの資格を持っている。日本ハムファイターズ応援作戦会議は2003年に結成、ファンミーティング開催などの活動を展開している。著書に「素敵なお客様～お客様は神様ではない!」(文芸社)がある。

なかった選手のエピソードですが、誰のこともだか想像してみましたか? 先輩が新庄剛志さん、野菜を食べるようになったのが、現野球解説者の森本稀哲さんです。森本さんは現在、全国各地から講演オフアーがたくさん来ていて引っぱりだこのです。シェフに毎日朝食を作ってもらうことまでして、食事にこだわる「見えない努力」をしてきた姿勢に、きつと共感するのだと思います。機会がありましたら、もっと深く聞いてみてください。成功談はもちろん、失敗談、しくじり談を赤裸々に楽しく話してくださいませ。

ところで母の正しいしつけで、私も今では積極的に野菜を取っています。えっ、スターになれましたか? 野菜は食べましたが、それ以外で少なからず好き嫌いがあったため、「ここ一番!」というところ勝てないスポーツマンでした(笑)。





アーティスト、いまだ地で
北に生きる

麻生敏子さん
道美展会員・北広島市

海外の風景を描き次々に受賞

公募展の道美展（北海道美術作家協会）に2006年にギリシャの風景を描いた油彩画を初出品して入選以来13年に受賞、「忙しいけれど元気でいられるのは絵を描いているからです」。

昨年9月、札幌市民ギャラリーで開かれた第51回道美展でもイタリアの風景を描いた『運河の街ベネチア・街並』（80号）を発表、3度目の会員賞を受賞、存在感を發揮した。「これからも海外の風景を描き続けます」。

「中学、高校時代はスポーツに集中、絵を描くことなど考えたこともなかったのです」。北海道羽幌高校（留萌管内）時代は、バレーボールの選手で全道大会にも出場した。だが「スポーツはもうダメ：」と思うようになり、「何かに集



入念に描き込んだ油彩、ローマの『パラティーノの丘』（20号）



「絵を描くことで多くの友人、知人ができました」と語る麻生敏子さん

あそう としこ

- 1945年 茨城県日立市生まれ。戦後留萌管内羽幌町築別で育つ
- 63年 北海道羽幌高校卒業。同年上京し、英文タイプライターの学校を卒業、貿易会社に勤務
- 73年 東京都から北広島市に転居
- 92年 この年から行政相談委員（総務省行政評価局委嘱）に
- 93年 油絵サークル『彩美』設立
- 97年 この年から2009年まで北広島市教育委員を務める
- 2006年 道美展に初出品して入選
- 07年 道美展で道知事賞、会友推挙。同年北広島市文化奨励賞受賞
- 09年 道美展で会員推挙
- 13年 道美展で会員賞、15年、18年にも受賞
- 17年 道美展で道美賞

道美展会員・絵画部会計担当、北広島美術協会、油絵サークル『彩美』会員

中するのが好きだったことから編物を始めた。さらに長女、華恵さんが中学から高校に進学した頃から「油絵を自由に描いてみたい」との思いが強まり、描いたこともないのに油絵サークル『彩美』を立ち上げた。40歳代だった。

同サークルは現在も続いており、女性8人が全道展（全道美術協会）会員吉田敏子さん（北広島市）の指導を受けながら絵を描いている。

道美展への初出品は、その13年後。初めから油絵に挑戦し、花や地元の北広島市の風景も描くが、道美展への出品は専ら海外の風景。これまでフランス、オーストラリア、香港をはじめイタリアには2回も訪れている。

それらの国の風景とはいっても観光客でにぎわう名所、旧跡など華やいだ光景ではない。描く中心は、いわば裏町や裏通りといったその街の歴史をしのばせる静かな環境のところにスポットを当てている。

「その街の雰囲気、人々の生活感といったものを感じ、描き込みたいのです」。従って絵には人々の姿はあまり無く、歴史をしのばせる古い建物や通りが中心で静寂な情緒を漂わせている。

ツアーで行く関係もあり、ゆっくりスケッチをする時間がなく「現地では専ら写真です。写真が沢山あり、そのままではなく感じてきたことを描き込むのです。そこには、私なりの夢があり楽しみがあります」。1点仕上げるのに3〜4カ月はかかるという入念な描き込み。早くも今年の道美展に出品する絵の構想も。北広島美術協会展、『彩美』展への出品もあり多忙だが「今度はスペインに行きたい」。

絵筆だけではない。2009年まで12年間、北広島市教育委員を務めたほか、現在は行政相談委員として活躍。かつて北海道書道展に入選したご主人、晶裕さんは連合町内会会長を12年務めている。

（文・写真 五十嵐恒）

熱血あぐり魂

第106回
「五百回魂」



このたび「あぐり王国北海道」が放送500回を迎えました。これほどの長寿番組にもかかわらずまったくパワーダウンせず、海外での放送や見逃し配信などで見てくださる人が増えていき、今なお新たな農業の魅力を世界へ紹介し続けている、とっても幸せな番組に成長してくれました。これも北海道農業、そして農業従事者の皆様のおかげです。いつもありがとうございます。

この10年で北海道各地をめぐりまくりました。一緒に参加してくれたあぐりっこの人数は延べ1464人、訪れた生産地は延べ530カ所、口ケでの移動走行距離は合計17万キロ。地球を4周以上もしているそうです。真夏の酷暑日も、大雨の日も、真冬の猛吹雪の日も、そこに農業がある限り全身で北海道を感じながら500回の口ケを行ってまいりました。パートナーであるHBCア



○HBC 北海道放送
○毎週土曜日17:00~17:30



ナウンサーも、ディレクターも、プロデューサーもみんな代替わりしてしまいました。私だけは毎回出演させていただいています。なんて幸せ者なんだと喜びをかみ締めております。

私ごとですが、この冬よりHBCで毎週日曜午後9時から放送している、「下町口ケット」というドラマに出演させていただいています。これまでは北海道の仕事を優先させてきたのですが、今年私たちが襲われた震災や、さらなる番組発展のために自分がいまでできることを考えた結果、「北海道で農業の未来を見つめている」という大役をドラマで演じさせていただきますことになりました。ドラマ撮影と農業の取材と、食育の講演会など忙しくやらせていただいています。全てにおいて北海道農業の看板を背負いながら、感謝と尊敬の思いで日々頑張ります。

これからも生産地と食卓をむすぶ役割、北海道農業を全国そして世界へ発信する役割、そしてかけがえない「食」を未来へとつなぐという役割を担っていることを誇りに思いつつ、北海道農業応援団長として、大声でエールを送り続けます！

■森崎博之「プロフィール」1971年11月14日生まれ、東川町出身。クリエイティブオフィスキュー所属。1996年演劇ユニット「TEAM NACS」を旗揚げ、リーダーを務める。2016年4月より、北海道のこれからの農業について考え、次世代へも発信していく番組「あぐり王国北海道NEXT」（HBC）がスタート。「熱血あぐり魂」（第1回〜72回）と、スペシャル対談企画などを収録した「生きることは食べること」森崎博之の熱血あぐり魂「発売中」。http://www.cue-products.com/

「芋ジャー」をコンサ選手に フェイスブックで特産品PR

JA今金町青年部

JA今金町青年部は昨年11月、会員制交流サイトのフェイスブックを活用し、リレー方式でサッカーJ1・北海道コンサドーレ札幌の選手にオリジナルジャージー「芋ジャー」を届けるという、とてもユニークな活動を行いました。ブランド馬鈴しょ「今金男しゃく」のPRなどを狙った話題づくりとして企画しましたが、予想以上の反響を巻き起こしました。「芋ジャー」は同16日に河合竜二選手(当時)、同29日には小野伸二選手の元に、それぞれ見事に届きました。



「芋ジャー」を着用し、満面の笑みを見せるJA今金町青年部の部員たち

伝統継ぐ「今金男しゃく」に誇り

今金町は渡島半島の北部に位置しています。市街地から車で西へ向かって走れば30分足らずで日本海が視界に開け、反対の東方面へ向かうと小1時間で内浦湾(太平洋)に行き着きます。

約5660haの田畑は比較的高い山にぐるりと囲まれた盆地の中に広がっています、この一角に日本の女医第1号として知られる荻野吟子(1851〜1913年)ゆかりの「インマヌエル教会」などの史跡も点在しています。

同町で馬鈴しょ栽培が始まったのは1891年です。1908年には川田龍吉男爵(1856〜1951年)が現在の北斗市で試験栽培を行い、その後、北海道各地に広まったこと由来する品種「男爵薯」の作付けがスタートします。

青年部の宮本翼部長は先祖の今金入植から5代目に当たる生産者です。「うちは曾祖父が男爵薯の栽培を開始し、代々農法を受け継いできました。機械化の進展などで作業環境は大き

く変わりましたが基本的な農法は、ほとんど変わっていないのが驚きです」と話します。

朝晩の気温差の大きい盆地特有の気象に加え、二酸化ケイ素を含んだ土壌や二つの海に挟まれているという海洋性気候などの自然条件と、「男爵薯」の取り合わせが最適だったのです。

JA今金町は53年から馬鈴しょの栽培品種を「男爵薯」に、ほぼ統一します。55年には特産銘柄品「今金男爵(当時)」とし、ブランド化に向けた厳格な基準を次々に打ち出します。その一つがでんぷんの含有量を示す「ライマン価」で、この数値が「13・5以上」に達しなければ市場への出荷を取りやめます。また、昨年3月には「今金男しゃく」として特許庁の地域団体商標を取得しています。

インパクトのある事業を

青年部は昨年、創立60周年の節目を

迎え、前部長の苅屋泰裕さんと副部長の仁木宏直さん、理事の植田竜司さんの同学生3人が記念事業の計画を担当するプロジェクトチームのメンバーになりました。

苅屋さんは入植4代目ですが、稲作と畑作がメインの同JAでは数少ない和牛繁殖の生産者です。家族で努力を重ね、盤石の経営基盤を築くとともに青年部活動のリーダーとして活躍しています。仁木さんは入植5代目。東京・渋谷に本社のあるIT企業の社員から2015年にUターンしました。また植田さんは陸上自衛隊から北海道警察に転職した元刑事。妻の実家を継ぐため14年に同町で就農します。

記念事業の計画に当たって3人は、二つの共通した考えを持っていました。一つは式典や記念誌発刊といった型どおりの事業ではなく、「インパクトのあるイベントにしよう」です。もう一つは創立60年の節目に合わせ、若い世代ならではの発想と行動力で、今金町の



淡いピンク色がとてもきれいな「今金男しゃく」の花(上)と、四方を高い山に囲まれた盆地に広がる圃場



知名度アップを目指すことでした。「今金がどこにあるのか知らない道民が多い。知名度を上げるには、長い歳月をかけて育ててきたブランド『今金男しゃく』を使った話題づくりが一番だと考えたのです(仁木さん)と振り返ります。アイデアを収斂(しゅうれん)して得た結論は、フェイスブックの活用でした。苧屋さんは「面白いコンテンツを発信したらフォロワーからフォロワーへと、数千人単位まで広がっていく。これを使わない手はないと思ったんですね」と話します。

その面白いコンテンツとして組上(そじょう)に載ったのが、JAグループ北海道が「オフィシャルトップパートナー」を務めている昨年絶好調の北海道コンサドーレ札幌とのマッチングでした。

この後は全部員(55人)に諮りながら企画を練り上げていきましたが、柱に据えたのはブランド馬鈴(かきんぼ)しょ「今金男しゃく」のPRとファンづくりです。宮本部長は「フェイスブックにたくさん投稿してもらうためには、とにかく楽しい内容じゃないといけない。その中で、生産者である自分たちの思いも伝えられた」と振り返ります。

予想以上の反響に大きな自信

使用する「芋ジャー」は当初3着の予定でしたが、届く確率を少しでも高めるため1着追加して計4着にしました。スタートしたのは11月1日です。起点は今金町2着と石狩市と東京が1着ずつ。このうちの石狩をスタートした「芋ジャー」が同16日、河合選手に。同29日には今金発の1着も小野選手の元にとどり着きました。

企画段階からキャンペーンをリードしてきた仁木さんは、「フェイスブックの反響に加え、日本農業新聞の全国版をはじめとする新聞の他、雑誌やラジオなどさまざまなメディアでも取り上げていただき、予想した以上の結果につながりました」と語り、相手を崩します。その上で、「『良い物を作っていれば消費者は分かってくれる』という考え方にとどまっていけない。これからは生産者が消費者に向かって『発信』していくことが大切」と続けます。

仁木さんは、道南地区農協青年部協議会会長でもあります。「若い世代にしかできないことであると思う。今回の経験を生かした事業を、みんなで模索

新農力発見 NOHRYOKU

「芋ジャー」をコンサ選手に フェイスブックで特産品PR



「男爵薯」を広めた川田男爵(上)と、イベントの企画・実行をリードしたJA今金町青年部の苧屋さん、宮本さん、仁木さん(写真左から)



届いた「芋ジャー」を着用する小野選手(左)



「今金男しゃく」の収穫作業に汗を流す生産者たち(上)と、ふかしたての「今金男しゃく」。ライマン価が高いため、ほくほくとした食感が特長だ



部員の意見と外部のアドバイスなどをまとめた結果、特製ジャージーの「芋ジャー」をバトン代わりにして知人から知人へと渡していき、最後には同チームの選手に届けるという案になったのです。

途中経過を把握できるよう参加者には「芋ジャー」を着用した写真とメッセージを書き入れて、フェイスブックに投稿してもらうというルールも作りました。さらに参加者には「今金男しゃく」1kgの贈呈も決めました。

「芋ジャー」はあえてやぼったいデザインにしました。胸には「今金」と「I M O J A」と記し、色も、地味な杜若(かきんぼ)など2色を用意しました。宮本部長は「田舎のイメージを出したかった。自分たちは今金という田舎で『おいしい馬鈴(かきんぼ)しょを作っているんだぞ!』との心意気も、アピールしたかったんです」と意図を打ち明けます。

「イモ、上等。」「コンサドーレに芋ジャーを。」というキャッチコピー入りで、部員がモデルとなったキャンペーンを告知するポスターも作りました。

していきたい」と力を込めました。

ふるさと発信に意欲

同JAによると、17年度産「今金男しゃく」は、104戸の組合員が合わせて402.7haの圃場で栽培。生産量と取扱額はそれぞれ1万2217t、8億2551万円でしたが、実にこのうちの95%が首都圏に出荷されています。厳格な出荷基準と生産者のたゆまぬ営農努力によって、首都圏の消費者から高い信頼と支持を得ているのです。ライマン価17という高品質の「今金男しゃく」も珍しくないといえます。

同青年部は15年ほど前、「JA青年組織手づくり看板全国コンクール」(全国農協青年組織協議会主催)で入賞したことがあります。作品のキャッチコピーは「大地の職人」でした。今回のキャンペーンを振り返り、宮本部長は力強くこうまとめられました。

「とても貴重な経験になりました。大地の職人として、営農技術に磨きをかけ、さらに消費者に喜んでもらえる『今金男しゃく』を作り、それを発信していきたいと思えます」

“イタリア”満喫したい

文=YASU
(タレント)



みに合うようにするよね。

誕 生日に何を食べたい? と聞かれると十中八九「イタリアン」と答える僕。子どもか!?

でもイタリアンがいいんだも〜んである。例えばスパゲティでありピザであり、とにかくチーズがトロける感じが身も心もトロけちゃうのである。イタリア人でもないのにいったいどこから来ているのだろうか?

考えてみると、日本人はほんとに繊細で、外国の料理を何でも上手に取り入れて日本人の好

だからきつと、こんなにイタリアンが好き僕も、日本人向けにされたイタリアンが好きなのかもしれないって思ってしまうんだ。もしかしたらイタリアに憧れる日本人でいいだけかもね(笑)

そして、やっぱり北海道は良いよね。小麦も牛乳も野菜も食肉も、みんなポーノ!!

子どもの頃、身近に「イタリア」はなかった。せいぜいあったのはナポリタン、そして給食によ

く出たあの三角のチーズぐらいである。

そうこうしているうちに、その後、時代の流れに乗って次々と繰り出されるイタリアンの攻撃に見事にノックアウトされてしまったのです。

とにかくイタリアンはなんかカッコいい。「ボジョレーヌーボー解禁」なんてそれみたことかである。バブルの頃から日本人が思わずうかれてしまうのがよくわかる。うかれて当然、うかれていいのだ! ちょい悪オヤジだったうかれたイタリアンな感じが良いでしょ!?

そんなわけで僕は、大人になった現在も特別な日には決まってイタリアンなのである。

自分で料理をするようになって、ちょっとオシャレたものを作ろうと思ってもやはりイタリアンなのである。さつきも書いたけど、北海道は食材の宝庫。今年も僕は、この食材を使って「イタリア」を満喫したいと思っています。最後までお読みいただき、グラッチェ!

VOICE NOTE

読者から

※私も誰かのやる気を引き出したい

昨年11月号「新農力発見」で、旧JA真狩村の生産者全員が男女を問わず正組合員になるという制度、素晴らしいと感じました。農業は特に夫婦が共同経営者であると強く思っていましたので、佐々木恭子さんのお話には感銘を受けました。
(千歳市・団体職員 女性)

※砂糖は大事なエネルギー源

「ブームアップ」を読んで、てん菜の作付けをやめる方が増えていることが分かりました。その一方、輪作体系をしっかりと守るために作付けを続けながら野菜を取り入れている方もいます。「砂糖は太るものと」悪者扱いされていることも残念です。大切なエネルギー源なのに…。もっと砂糖の価値を取り上げ、教えてほしい。
(芽室町・農業 女性)

※身近に感じる「広報ほくれん」

ホクレンは巨大組織で、組合員の一人としては遠い組織のように感じてしまいましたが、「広報ほくれん」を拝読していると身近な自分たちの組織なんだなあとつくづく思います。
(月形町・農業 男性)

※食べたくなった大あんまき

愛知県出身の私にとって道産流通レポートに掲載された藤田屋の大あんまきは、ソウル・フードの一つです。久しぶりに食べたくなりました。今、十勝に住んでいます。大あんまきのあんが十勝産とは知りませんでした。今後は北海道の農畜産物を紹介してください。楽しみにしております。
(芽室町・地方公務員 男性)

編集だより

新しい年が幕を開けました。今年は、ホクレンが創立100周年を迎える節目の年でもあります。1983年に誕生した「広報ほくれん」は、その歴史の3分の1以上にわたる36年間、ホクレンの取り組みを皆さまにお伝えしてきましたが、その体裁や内容については、時代の変化に合わせて、何度かの見直しを経て今日に至っています。創立100周年の本年も、本誌の役割を再確認する貴重な機会と捉え、皆さまとの絆がさらに強まるような誌面作りを目指してまいりますので、今後も率直なご意見、ご要望をどんどんお寄せください。皆さまと共に歩む広報誌でありたいと思っています。(S)

— 今月の素材 —

卵

伊達巻き ～極上の味を手作り～



クッキングキャスター
星澤幸子先生

旬な一品

星澤幸子の

1人当たりカロリー 126kcal / 塩分0.8g

◎ 材料 (4人分)

- 卵 3個
- はんぺん 1枚
- 水 大さじ2杯
- みりん、酒 各大さじ1杯
- てんさい糖 大さじ2杯
- 塩 ひとつまみ
- 油 少々

✂ 作り方

- ①ミキサーに卵1個とざく切りにしたはんぺん、分量の水、調味料を入れて滑らかになるまで回します。残りの卵も入れて少し回します。
- ②卵焼き器に油を薄く塗り、卵液を流し入れます。フタ代わりにバットをのせ、弱火で15分ほど焼きます。
- ③表面が乾いて焼き色が付いたら、焼き目を下にしてすだれにのせます。手前からきっちり巻いて輪ゴムで留め、立てて冷めます。
- ④冷めたら1.5cm幅に切って盛り付けます。

👉 ワンポイントアドバイス

魚のすり身を入れた厚焼き卵を巻いた「伊達巻き」。はんぺんを使うとご家庭でも簡単に作ることができます。きれいに形を作るには、熱いうちにすだれで巻いて、立てて冷ましましょう。バランスの良い円柱に仕上がります。



🎁 今月のプレゼント応募方法

アンケートはがきに氏名、住所、電話番号、ご意見・ご感想をご記入のうえ、「プレゼントに応募する」に印をつけてお送りください。当選者の発表はプレゼントの発送をもってかえさせていただきます。プレゼントは11ページに。

締め切り: 2019年2月10日 (当日消印有効)

- 本誌掲載の記事・写真・イラストなどの無断転載を禁じます。
- 個人情報の取り扱いについて
当編集部で所有しております個人情報に関しましては厳重なる管理の上、本誌、プレゼントの発送のみに使用させていただきます。

あて先と個人情報に関するお問い合わせ先

〒060-8651 札幌市中央区北4条西1丁目
ホクレン広報総合課「広報ほくれん」編集部
☎011-232-6108 E-mail: koho@hokuren.jp
広報ほくれんに対するご意見・ご感想をお待ちしております